

人絹王国福井の象徴

# 人絹会館跡

(福井市順化1丁目福銀センタービル)



竣工当時の人絹会館



西野藤助胸像



人絹取引所記念絵  
はがき

明治10年代後半、輸出羽二重の需要は高まるが福井にはその製織技術がなく、桐生から技術者高力直寛の招聘にこぎつける。明治20年3月高力は福井に入り、3週間羽二重講習を行った。これが織維王国福井の出発点となった。輸出羽二重は急速に県内に普及し、京都や両毛(桐生、足利)に代わり、絹織物でのトップの地位を占め、生産は大正8年にピークを迎える。しかし、その後は第一次世界大戦後の不況もあり、輸出は大不振に陥った。代わって登場したのが人絹織物である。人絹は、木材パルプなどのセルロースから糸を作る人造繊維で、当初、本絹を扱う福井産地は、人絹織物に対して慎重

であったが、旧来の織技術が生かせるため次第に生産が本格化し、昭和6年には輸出人絹織物が輸出羽二重織物を追い抜き、「人絹王国・福井」といわれるまでに飛躍を遂げる。その象徴となったのが人絹会館で、昭和8年に建築構想が打ち出された。その前年の昭和7年には、東京、大阪との競合の末、福井に世界初の人絹取引所が開設されており、人絹王国に相応しい本格的な取引所施設の建設も望まれていたのである。昭和11年4月に着工し、12年5月竣工した。住所は佐佳枝中町34、35番地(現順化1丁目)で、建築延床面積1,057坪、地下1階地上4階鉄筋コンクリートづくりのモダン

な建物であった。設計は渡辺建築事務所(大阪)、施工は清水組が請負い、北側には人絹取引所が併設された。総工費は当時の貨幣価値で50万円に達した。建設推進にあたったのが、業界最大手で「人絹王」と言われた西野藤助で、人絹取引所理事長などの要職にあつた(後の福井商工会議所会頭)。しかし西野は、着工を待たず、昭和9年9月病没した。遺言で建設資金に30万円、福井県へ60万円、商工会議所等と合わせると寄付総額は100万円に達した。人絹会館は戦災や福井大地震でも倒壊を免れたが、老朽化により昭和59年惜しまれながら取り壊された。